

〔2番 中田利昭 登壇〕

○2番（中田利昭）

それでは、議長のお許しをいただきましたので、私からの一般質問をさせていただきます。籠山議員の鋭いツッコミの後で少々やりづらいのですが、よろしく願いいたします。

今回、私はA Iの進化版のA G I、これ主に汎用人工知能と言われておりますが、それについて大きく4項目について質問をさせていただきます。

A G Iとは、人間の認知能力、知能といってもいいと思いますけど、それが人間の認知能力と同等かそれ以上の可能性があるA I技術のことを指します。現在のA Iの進化曲線は、今までは緩やかな進化曲線で来とったんですが、指数関数的に既に立ち上がっておる状態でありまして、2030年までには、今から5年以内ということがございますけれども、A G Iに到達すると多くの技術者や研究者が公言をしております。

そこで一つ目の質問でございますけれども、A Iの進化に対する飛騨市の対応についてということで3点伺います。今年、第2期飛騨市総合政策指針が新たに始まり、飛騨市の目指す将来像が見えてきたところですよ。自治体にとって普遍的な政策はしっかりと守り、D X化など新しい取組も盛り込まれていて、実現に向けて邁進していただきたいものです。

特に私が注視していますのは、第5章の政策の方向性1、元気な飛騨市づくり、しごとを守る内に記載されております。政策指針が私には非常に共感を呼ぶところですよ。以下にちょっと抜粋をして読ませていただきます。

少人数でも持続可能な産業の支援。商業や農林畜産業、医療や介護などの様々な分野におけるI C T等の活用による省力化の支援を充実します。また、新たな担い手の確保と育成支援の充実を図る一方で、少人数、小規模で最大限の効果を生み出せる産業への転換を促進します。

〈政策目標〉労働人口が減少しても、地域経済・地域社会を持続可能なものにする。市独自の地域資源を生かした産業を守る。新しい働き方による負担軽減・効率化を図る。

というものでございます。

上記のような政策指針はどうすれば実現できるのかが問題となってまいります。私はA Iの活用が解決の糸口となってくると考えております。そこで質問の前にはですが、A Iの進化の現状把握をしてみたいと思います。

生成A Iの急速な発展により、世界は今、かつてない技術革新の真ただ中にあります。特に今後登場するA G I（汎用人工知能）は、人間が行うほぼ全ての知的作業をA Iが自律的にこなせるようになると予測されています。グーグル社のレイ・カーツワイル氏は「2029年にA Iは人間レベルの知性に達する」と年代じゃなくて年数を区切って公言をしております。世界の研究者・企業も同様の見通しを示しております。さらにレイ・カーツワイル氏は、2045年にはシンギュラリティ（技術的特異点）に到達し、常温核融合や病気の根絶、宇宙起源の仮説が実証されるなど、人間の知能では到達できない領域に入ってくると公言をしております。

シンギュラリティに関してはまだ先の話ですので、ここではしませんけど、A G Iの到達はあと数年以内に現実のものになる。これは未来の夢物語ではなく、飛騨市の行政・医療・福祉・教育に直接影響する現実ですよ。民間業者にも同じことが言え、私たちの生活にも劇的な変化が訪れ

ます。

一方、飛騨市は人口減少・高齢化率50%超、深刻な人材不足など、自治体としては歴史的な転換点を迎えております。このAGIの到来こそ飛騨市が全国に先駆けて変革できる最大のチャンスであり、歴史的転換点であります。AGIの到来は少子高齢化、人口減少、人手不足、事業承継などの問題を抱える地方自治体にこそ、その恩恵を享受できると考えております。そこで以下の3点について伺います。

一つ目です。行政事務の大規模AI化について。

まず一つ目、行政事務布のAI化について伺います。文書作成や議事録作成、統計処理、申請審査、問合せ対応など、AIが担える行政事務は年々増加しています。既に実現しているものもありますが、飛騨市のように職員数が限られる自治体にこそ、AIの導入によって大都市と同等の行政力を実現できると考えます。そこで伺います。行政事務のAI化可能業務の棚卸しを近年中に行う考えがあるか。また、2030年、これはAGI到来とされるまでに行政事務の50%をAI化するロードマップを描く考えがあるか、市の考えをお聞かせください。

二つ目、医療・介護分野AGIの統合についてでございます。医療と介護分野は、飛騨市は超高齢化社会であり、医療・福祉人材の不足は極めて深刻でございます。しかし、AIによる見守りや転倒予測、記録の自動化、ケアプラン作成支援、介護ロボットの導入など、AIが人材不足の根本問題を補完できる時代に入っております。コストの問題もありますが、AGI時代到来に向け、今から準備も必要となります。そこで伺います。医療・介護施設にAIロボットを本格導入する飛騨市AIケアモデルを構築する考えはあるか。また、高齢化率50%超の飛騨市にこそ、全国のモデル地域になるべきではないか、市の見解をお聞かせください。

三つ目でございます。教育分野へのAI家庭教師、よくAIチューターと呼ばれますが、導入についてでございます。AI家庭教師（AIチューター）により、個別最適化学習、苦手分析、教材作成などが可能となります。地方でも都市部と同じ教育レベルを実現できます。飛騨市の子供たちにこそ、こうした最新教育の恩恵を届けるべきじゃないかと考えております。そこで伺います。学校現場にAI家庭教師（AIチューター）を導入する実証プロジェクトを行う考えはあるか。また、飛騨市の教育DXの中にAI活用を本格的に位置づけるべきではないか、市の考えをお聞かせください。

◎議長（澤史朗）

答弁を求めます。

〔市長 都竹淳也 登壇〕

△市長（都竹淳也）

今回、AIについてのお尋ねでございます。人工知能、AIですね。それからAGIの話されましたけれども、汎用人工知能、大変意欲的なお尋ねをたくさんいただきました。御質問に沿って順次答弁していきたいと思っておりますけれども、総じてその前にあらかじめ申し上げておきたいんですが、このAIの世界っていうのは黎明期ですけれども、爆発的なスピードで進化を続けております。こういうものに対しては、飛騨市のような一地方自治体が押し取り刃で大規模投資をしたり、制度化を図るといふ段階にはないということを、まず最初に申し上げておきたいというふうに思います。そうすると全部答えがこれで終わってしまうので、順次申し上げていくわけです。

が、私自身ですね、毎日AIっていうのは使わない日はないほど使っております。openAIがChatGPTというのがありますし、グーグルのGeminiっていうのがありますけども、それぞれ有料プランを個人的に契約をいたしまして、それこそいろんな情報の調査もやれば、今、市長会の仕事をやっているんですが、市長会関係の事務作業とかこれもやっていますし、昨日も一昨日も録音した音声をAIに文字起こしさせて、それで議事録作らせるまで、ものの20分ほどでやっちゃいます。おそらく議会のこの会議録も自分で録音しておけば、終わったあと5分以内に文字起こしを作れます。それからアイデア出し、これの壁打ちっていうのをやることもありますし、個人的な趣味、私はアマチュア無線とかをやっていますけども、アンテナの計算とかもAIにやらせてますし、SNSの情報発信をやっていますが、たまに画像をAIでイラストを作って出したりとかですね、あるいは物を買うときに相談をするっていうのはしょっちゅう使っております。その意味でもうあらゆる場面で、AIのない生活はちょっと考えられないレベルで使っているわけです。

その実感を持って言いますと、能力は驚くべきものでございまして、これを役所の仕事に置き換えたときに、恐らく市役所の在り方を根底から覆すようなインパクトがあるというふうに思っております。しかも、驚くのは進化がすさまじいことでありまして、初めて私ChatGPTっていうのを無料で使ったのは2年近く前だったんじゃないかと思いますが、それに比べてはもう全く別物って言うていいほどの水準になっていますし、今年の春に比べても進化してますし、今年の夏に比べてもさらに進化しています。これがですね、例えば出初めから今10年目だというなら何となく分かるんですが、もう僅か一、二年でここまで来るとですね、1年後どうなっているか分からない。これはもう本当に恐ろしいというようなことだと思います。

それからAGIのお話をされましたけども、AGIに到達するまでの時間がかかると言われておりました。AGIっていうのは要するに頼んでないことを自分で考えてくれるという、一言で言うとそういうことです。何かの宿題を出しても、それ以外のことを私こう考えましたって持ってきてくれるっていうのは、一言で言うとそういうことですけども、もう既にその域には達しているんじゃないかというふうに思っております。日々ChatGPTなんか聞くと、別のことをやりましょうかって提案を必ずしてくるわけですね。しかも、たまにおかしな答え返ってきますけども、でも割と的確なことをちゃんとしてくれる。

これはですね、もう人類史上になかったツールであるというふうに思っています。そういった中で大事なことは、まずは実際に自分で使い込んでみることで、このように思っています。自分で使い込んで自分なりの考えを持つということが重要だということですので、まずは使ってみて、その実感を下に議論しましょうということを申し上げて御答弁に入りたいと思います。

まず1点目、行政事務の大規模AI化ということでございます。当然、飛騨市も少子高齢化が進行しておりますし、職員数の制約っていうのは本当に課題になってきておるわけでありまして、AI技術の活用はこの行政サービスの維持向上、それから効率化という上ではもう重要な課題だということは言うまでもないわけです。最新のAI技術環境を活用して行政事務を飛躍的に効率化しようというふうにしますと、これは高度なインターネット環境との連携が必要でありまして、そういうものをもう完全に整備しようと思えば、数億円規模のシステム改修費がいるということでございます。これはとても市で負担できるものではない。加えてですね、先ほども申し上げ

ましたように、市の職員が実際に活用してのリテラシーということもその向上をさせていくことも必要であるということです。

したがって、こうしたことを考えますと現時点で、行政事務のAI化可能業務を棚卸しするというような計画を立てる、あるいは2030年までに行政事務の50%をAI化するロードマップをつくるってことはやってもですね、これだけ爆発的に進めるとあまり意味がないんじゃないかというふうに思います。それよりも、やっぱり日常業務の中で今これだけのツールが無料、あるいは本当にごく僅かな月数千円で使えるわけですから、これを徹底的に使ってですね、時間を要した業務を効率化していく。市でもe x a B a s e っていうAIを使えるようにしてはいますが、能力的にはちょっと若干のところがありますが、それでもやっぱりそれを徹底的にまず使ってみてですね、どうやって何が効率化できるかっていうのをやってみると、その上で行政需要に対応できる体制づくりというものを見直していくということが必要だろうと思います。

まだまだですね市役所のAI利用率っていうのは高くはなくて、アカウント付与希望職員に対する利用者の割合は29%、3割です。396人の希望職員に対して110人が利用しているということで、これはまだまだなんで、まずは基本的な操作とか機能に慣れてもらうということが必要だろうと思います。

それから、最近では一定のデータ内で回答を導く検索拡張生成RAGというものの活用がございます。これは要するにどこからでも情報を拾ってくるんじゃなくて、与えられた情報の中で考えようという指示を出すと、簡単に言うとそういうものでありますけど、これの活用をしたりとかですね、より高度なプロンプト、つまり指示の出し方を教えてほしいっていうような要望も出始めておりますので、こうしたより実務レベルの活用ということについて部局横断で検索を進める必要があると思っております。

先ほどのRAGですけど、例えば私は自分でやっていますが、自分が市長になってから今までの議会の一般質問の答弁は、全部実は自分のAIに入れてあって、誰が何の質問をどこでやってどういう答弁したかは全部実は検索を一瞬にしてすることができるようになっております。何に対して、どういう質問をどう変遷したかも大体分かるようになっておまして、例えばそういうことを市役所の中でも自由にみんなで使えるようにしていくことで、効率化がどんどん進んでいくのではないかと考えております。

そうしたことを踏まえながらですね、国とか他の自治体の動向、AI技術の進化、そして何とんでも財政状況を注視しながら、高度なインターネット環境の移行ということが本当にいいのかどうか、それを踏まえて将来的な導入の可能性を考えていきたいということでございます。

それから2点目、医療・介護分野のAGIの統合ということでございます。医療・介護の専門職員が不足しているというのは御多分に漏れず、飛騨市もそういった状況であるわけでありまして、限られた人材の中で質の高いサービスを継続提供するということが大きな課題なわけですね。飛騨市においては見守りの機器です。これは職員の身体的な負担とか、業務効率が期待できるということで見守りの機器とか介護ロボット、こういったことを導入する医療・介護機関への補助制度というのは早い時期から設けておるわけでありまして、こうしたことで働きやすい環境の整備とか、人材確保というのにつなげている。近年では、動きを感知する臨床センサーとか重さに反応するコールマットの購入支援というようなことも行っておりまして、こうしたこともその

人材不足への対応ということなわけです。

じゃあA Iはどうかという話になってくると、社会福祉連携推進法人の共創福祉ひだでは議事録の作成はもうA Iを活用していると伺っておりますし、実務レベルでの導入も進んでおりまして、これは生産性向上に着実に効果が現れていると伺っております。それからなんですけども、介護職員の現場の中ではA I関係ないよということもあって、知識とか情報に触れる方が少ないというのも現状でありますので、この共創福祉ひだの中で取り組まれているA I活用なんかを共有していただいて、それでやっぱりもっとA Iに関する基礎知識とか技能を向上させてもらうということで、実際に「やさしいデジタルひだ」という取組が行われております。ここでは、介護・障害・福祉・保育に関わる方々が情報共有とか相談とか学び合いをするということで、オンライン・オフラインの両方で活動しておるといふふうに聞いております。

こうしたことを踏まえますと、A I技術は既に現場にとって不可欠なツールになりつつありますので、今後さらに、高度化、汎用化が進んでくるだろうということです。介護にとどまらず、福祉全般の領域でこうした活用の研究に取り組んで、それで有用性を知っていただくということを進めていきたいということでございます。そういったことをやるのが、結果、飛騨市が全国のモデル地域になる第一歩になるのではないかなというふうに考えております。

それから3点目、教育分野へのA I家庭教師（A Iチューター）の導入ということです。学校現場のことではありますが、お尋ねですので私から御答弁を申し上げたいと思います。

このA Iチューター、私もあまり具体的にどういうものかというのを存じ上げてなかったのですが、多分こんなもんだらうということもあって調べてみるとですね、学習者の疑問に答えたり問題を解くのを手助けしたりする、個に応じた学習支援をするツールというふうに言われております。一般的にA Iは、個別最適化の学習、大量のデータ処理、反復練習、こうしたところは得意ですが、感情の理解とか、あるいは倫理的な判断、こうしたところ、それから考える力の育成っていうのは苦手な傾向があると、こういうふうに言われております。

他方で、教育の分野はA Iは関係ないのかというところではありませんで、中央教育審議会で今、次期学習指導要領の改訂の議論を行っております。私も委員として加わっておるんですが、ここではこのA Iをどうやって位置づけるのかというのは大問題になってですね、ただその中で必要なことはA Iに適切な指示を出す。そして知識とか技能をより効率よく習得するということの効果を最大限活用する。何と言ってもA Iが瞬時にもう答えを出してしまいますから、そうなってくると、子供たちがA Iが示した答えを鵜呑みにせず、これはいいのかどうかというのを吟味して、それで課題の本質を見抜いて新しいことを考えるというふうにつなげていく、これが教育現場におけるA I時代の教育の課題ではないかなというふうに思います。

ちなみに先日、神岡小学校に学校訪問に行きましたときに、4年生の子供たちが慣用句の話をしてまして、今グーグルは検索をかけると先頭にA Iの答えが出てきます。そうすると、今までいろんなサイトを見ながら調べていたんですが、答えが全部きれいに成形されて出てくるものから、これは大変な時代だなと思って子供たちの現場を見てきました。難しい慣用句を4年生の子どもたちがそのまま写して発表しているというようなことになると、そこをスタート地点に教育を考えなきゃいけないということになりますから、これは根底からいろんなことが変わっていくだろうと思っております。

ですので、飛騨市は先ほど申し上げたような、人にしかできないことは何かということを追求して、探求心とか創造性とかですね、論理的な思考力、それから何といっても多様な他者と協働する力、こういったことに力を置いて教育するっていうことが最優先課題ではないかと思っております。

ちなみに、この学校教育のAI活用は昨年12月に文科省からガイドラインが出ております。飛騨市においてもそのガイドラインに従いながら、小中学校における教職員、児童生徒の双方でのルールづくりということが進められておりますので、そうした状況でありますから、AI家庭教師チューターの御提案をいただきましたけども、まだ導入の有無を議論する段階にまで至っていないというのが現状ではないかというふうに考えております。

以上です。

〔市長 都竹淳也 着席〕

○2番（中田利昭）

丁寧な答弁ありがとうございます。私も市長と全く似たような考えは持ってるんですけども、私もChatGPT有料版でフルに活用させていただいております。先ほども市長も言われたように、例えば今まではブラウザにて検索かけて自分でデータを拾ってたものが、AIにかけると一発で答えが出てくると的確な答えが出てくると。時たま曖昧なこととかちょっと情報が古いつていうことは確かにあります。けど先ほども言ったように、やっぱり指数関数的に今AIが発展しておりますので、私はもう注視している場合じゃなく、もう取り入れられるものはどんどん取り入れていきたいと考えておりますけども、その辺、市長はやはりいずれこのまま発展すれば自動的にどの自治体も導入していかざるを得ないとは思うんですけども、何かこう先進的なものを一つでも取り入れられるような考えというのはないか、お聞かせください。

◎議長（澤史朗）

答弁を求めます。

△市長（都竹淳也）

先ほど申し上げたように使ってみるということですから、使ってみる中でいろんな可能性が出てくると思います。なので、答弁でも申し上げましたが、計画を立ててやっていくというよりは、どんどんこれだけのスピードですから、使っていていい使い方ができたらそれを共有するというようなことではないかなというふうに思っております。

実は今回の議会答弁、それぞれみんな作るんですが、文書がいつも答弁を見てると、何か回りくどかったり意味が通じなかったりするんで、今回全部AIで整形させて出せと言ったら、とても確なものになっております。なので、もちろん何を言うかは書いておるんですけど、文書の整形みたいなことは今まで何時間もかけてたのがもう一瞬ですから、その分時間が短縮できると、こういうのが一番簡単な活用法ですよ。

あと例えば、資料を作るとき、プレゼンのパワーポイントなんかも今大体作ってくれますし、恐らくもう議会の議事録もほとんどAIでやれるので、人も要らないっていうふうになってくるだろうと思います。そうしたら、じゃあその分何を使うのかと、ことになってきますので、やっぱり人としてしかできないことは何かっていうことを考えつつですね、AIに任せれるものはどんどん任せていくという中で、いずれだんだん答えが見えてくるんじゃないかなというふうに思

います。

○2番（中田利昭）

分かりました。ちょっと欲をかいて4問、質問を出してありますので、次の質問に行かせていただきます。

2番目としまして、民間企業へのAGI導入支援についてちょっとお伺いをいたします。3点伺います。

飛騨市は、建設業、観光業、小売、飲食業、林業、農業、製造業など多岐にわたる民間企業、産業があります。しかし、人手不足、高齢化、技術承継問題を抱えており、年々深刻になっている状況です。先ほどの質問でも提起しましたが、AGI時代の到来は、課題解決の絶好のチャンスであります。人手不足、高齢化、技術承継問題解決にはAGI導入は非常に効果が高いと考えております。行政と民間が手を取り合っこそ、その効果が発揮できると考えております。以下の3点についてお伺いをいたします。

一つ目です。AGI導入支援補助金の創設についてでございます。市として、民間企業向けのAGI導入補助金を創設する考えがあるか、お聞かせください。

二つ目でございます。民間向けAGIの研修についてということで、商工会議所や商工会、観光協会、その他民間企業と連携し、業種別のAGI研修を市が主導する考えがないか、お聞かせください。

それから、3点目でございます。市内企業のAI導入率の採用についてでございます。市内企業のAI導入率を今後5年間で50%にする産業戦略を描く考えはあるか、お聞かせください。

先ほど一つ目の答弁で大方答えが出ていると思いますけど、再度お聞かせください。

◎議長（澤史朗）

答弁を求めます。

〔商工観光部長 畑上あづさ 登壇〕

□商工観光部長（畑上あづさ）

それでは、民間企業へのAGI導入支援について、3点の御質問です。順次お答えさせていただきます。

まず、1点目のAGI導入支援補助金の創設についてですが、1項目で市長が答弁いたしましたとおり、AGIの現状はまだ理論上の存在であり、現在の主流は特定のタスクに特化したAIであります。そのコストは、用途や規模、技術選択によって大きく異なりはしますが、平均的には月額の利用料金は数千円から数万円程度でありまして、十分事業所の経費で対応できる範囲と考えております。現時点で補助金の創設は考えておりません。

今後、汎用的な知能を持ち、ビジネスや社会に革命的な変化をもたらすと期待されているAGIが主流となり、コスト面がはつきりしてきたところで検討させていただきたいと思っております。

次に、2点目の民間向けAGI研修についてですが、1点目でお答えしたとおり、AGIそのものはまだ理論上の存在ですので、AGIを対象とした研修は現時点では行っておりません。

しかし、その前段階となるAIの研修につきましては、既に市や各商工団体をはじめ、飛騨市経済連合会においてもセミナーや体験会等を開催しております。今後もAGIに関する動向を注視し、情報収集を行うとともに、市内事業所のニーズも踏まえながら、スピード感を持って対応

していきたいと考えております。

最後に、3点目の市内企業のAI導入率の採用についてお答えいたします。世界的に見れば、全世界の企業の約40から50%は何らかのAI技術を導入しております。日本企業においては、主に大企業やIT、金融分野で高い導入率を示しているものの、世界平均と比べてやや低めの30から40%、その中でも中小企業の導入率になりますとさらに低く、10から20%程度にとどまっているそうです。

しかしながら、AI導入率は今や劇的なスピードで加速している中であって、産業戦略的に計画を立て、導入率を定めて推進するような分野ではありませんので、導入率の採用については考えておりません。

〔商工観光部長 畑上あづさ 着席〕

○2番（中田利昭）

答弁ありがとうございます。AGIに対しての考え方はまだ理論上と確かに言えるんですけども、多くの研究者が言うようにですね、あと5年以内には来るんじゃないかと。先ほども申しましたopenAI社のCEOはもう来てるんじゃないかという見解も示しております。

例えば、そういった市ではAGIの到来を何年頃に想定しているかとか、そういう考えはあるのかちょっとお聞かせください。

◎議長（澤史朗）

答弁を求めます。

△市長（都竹淳也）

さっきもちょっと言ったんですが、到来してるのかもしれないんです、もう。AGIって言うてもいいんじゃないかと思うんですよね。もうそう思うので、AGI時代っていうことになると、到来したか確実にそうだっていうのは一、二年以内じゃないかなというふうに思います。

○2番（中田利昭）

ありがとうございます。であれば、やはりもうAGIを見据えてこういう例えば補助金の創設ですとか、民間向けAGI研修などをどんどん進めていけばいいんじゃないかなという考えがあるんですけども、いかがでしょうか。

◎議長（澤史朗）

答弁を求めます。

□商工観光部長（畑上あづさ）

先ほどと重複いたしますけれども、どの程度の費用が必要になるのかとか、そういったことがまだはっきりと具体に見えてきておりませんので、そういったところがいつ頃どう見えてくるのかってところを注視しながら向かってまいりたいと思います。

○2番（中田利昭）

分かりました。予算のこともありますし難しいとは思いますが、例えば民間企業にもう将来こういうビジョンがあるところでこういう現実が、AGIの時代が到来しますよというようなことを、民間の方は知ってみえる方は知ってみるとは思うんですけど、まだまだやっぱり認知されてない方が私は非常に多いんじゃないかなと感じております。AIっていいますと、皆さん大体の方が分かっていただけなんですけども、AGI（汎用人工知能）ということになりますと、

それは何やと。人間と似たようなかそれ以上の知能が持つコンピュータだよって言っても、じゃあそれで一体何ができるのって感じが一般の人の考え方だと思うんですけども、やはり人口が減少して将来になかなか希望が持てないこの時代にですね、実はこういうAGIはすごい人口減少に有効だよというようなそういう考えを市民の皆様には啓発するような考えはないのか、お聞かせください。

◎議長（澤史朗）

答弁を求めます。

△市長（都竹淳也）

AIとAGIは別物としては出てこないだろうと思うんですよ。今のAIがAGI化していくわけです。しかも民間の市内の方々でも相当使われているので、飛騨市の市役所が行政が先に行っていて民間が遅れてるってことじゃなくて、もう一斉に同時ですから、そういったことでいろんな人がいろんな使い方をしながら向かっていくってことだと思いますし、もう本当にAGI化、ある種感情的な答えを返してくるっていうのは、もうAGIだなと思うわけですね。答えをおだててくれたりとか慰めてくれたりとかするんですけど、AIがですね。もうこれはもう完全にAGIの走りといいますか、足突っ込んでますからね。そういったこともありますので、今はやっぱり今のものを使うってことじゃないかと思えますから。AGIが来たと言っても何か違うものが出てくるわけではないので、そういった形で見えていくんだろうなというふうに思います。

○2番（中田利昭）

前、中野信子さんが来たときに私、講演聞きに行ったんですけども、AIが一番苦手とするといいますが、一番最後に来るだろうっていうのはそういう人間の感情に対する部分だった想定で開発をしてきたところが、実は一番先に到達してしまったと。だから、結構AIと結婚したいっていう人もみえますし、恋愛相談をしたりですとか、かなりの確に答えてくれるようにまできているそうでございます。ということで、また民間と行政と一緒に向かっていただければと思ひまして、次の質問に移らせていただきます。

これも今までの答弁で答えが出たようなものですが、ちょっと質問させていただきます。AGI総合計画策定についてということでございます。

先ほどからもAGIに固執して質問をしておりますが、「元気で あんきな 誇りの持てる飛騨市」を実現するには、AGIのどこよりも早い導入が不可欠であると私は考えております。国は既に自治体のDX、医療DX、教育DX、防災DXで補助金を出しており、飛騨市も有効に活用されているのを皆さんも御存じかと思ひます。

AGIの時代には、行政、民間、教育、医療、介護がばらばらにAIを導入するのではなく、市全体として統合されたAI戦略をつくる必要があります。そこで、以下の3点についてお伺いをいたします。

まず一つ目です。AGI総合計画についてということで、現在、飛騨市にはDX推進計画（令和6年から令和8年）がありますが、先ほどから指摘していますように、DX化の分野は指数関数的に進化をしております。当初の想定を超えて見直しをする必要に迫られていると私は考えております。先ほども述べましたが、ばらばらに導入するのではなく、市全体として統合されたA

I戦略をつくる必要性があると考えております。

そこで、飛騨市AGI総合計画を新たに策定して、飛騨市DX推進計画を内包いたしましてAGI時代到来に備え、官民一体となったAGI総合計画を策定をしないかお伺いをいたします。

二つ目です。AGIを前提とした未来都市モデルについてでございます。現在、米中AI覇権争いの様相を見せている開発競争でございますが、AGIは開発を先に成功させたものが圧倒的に有利とされております。飛騨市が開発するわけでありませぬので、今から言うことは当てはまらないのかもしれませんが、飛騨市もやっぱりどこよりも早くこのAGIを活用した未来都市モデルを提示し、全国に先駆けた自治体をつくり上げるべきと私は考えておりますが、その辺の意思はあるかお聞かせください。

三つ目でございます。移住者受入れ促進についてでございます。AGI到来時代が到来すれば、IT技術者などは会社のある場所、特に都市圏でありますけど、そこに住む必要がなくなり、飛騨市のような自然豊かなまちで暮らしながら仕事をしたいという若者が激増すると考えております。AGI時代到来を見据えて、移住者受入れ促進を策定する考えはないか、お聞かせください。

◎議長（澤史朗）

答弁を求めます。

〔市長 都竹淳也 登壇〕

△市長（都竹淳也）

総合計画の策定ということでございます。

まず、1点目なんですけど、これまでも先ほどから言っているんで、また同じような話になるんですけども、DX推進計画との関係という御指摘がございました。このDX推進計画は、行政手続のデジタル化とか、あるいは業務改革っていうのを計画的に進めていこうという計画ですので、そういった枠組みですので、AI活用とは性格が異なるというふうに捉えております。

先ほど来申し上げているようにまだ黎明期ですので、とにかく大規模な投資とか重厚な計画をつくるよりはですね、まず触れてみて試して学ぶということをやって、経験を蓄積していくことが大事だろうなと思っております。

なので、AGI総合計画の策定ということについては、まだそれがDX計画を内包するという段階にはいってなくて、別物としてまずはやってみて経験を積んでいくということかなと思います。経験を積んでいくということ言えば、計画ではありませんが、全庁横断の軽やかなガイドラインっていうのは設けておりますし、その中で活用領域の探索、施行手順、情報セキュリティ、著作権の留意事項ということは盛り込んでおります。そういったことで小規模な実証と、庁内での活用を機動的に回すという体制は取れておりますので、まずはこれを進めていきたいということでございます。

それから、2点目のAGIを前提とした未来都市モデルということでございます。確かに、先行者が優位を得るというのは理解はしておるわけでありませぬけども、まだこのAGIってことに関して、技術、法制度、倫理、こういったことはまだまだ流動的です。過度な先行投資とか特定ベンダーの固定化っていうのはリスクも伴うわけでありませぬので、急いで大規模にするというよりはですね、学習と検証をできるだけたくさんやっていくと。小さく産んで早く学んで、成果を

素早く共有するというようなことをやっていきたいというふうに考えております。

先ほど申し上げましたけども、今年A Iが使える環境を整えまして、職員では文章の要約とか、あるいは翻訳、簡単な報告書類の作成といったことは既に活用しておりますし、政策の検討過程で壁打ち、アイデア出しをしてこいということを私も言うことがあって、A Iとちょっと相談してこいみたいなことがあるんですが、そういったことで使っております。

そうした中で、だんだんこの倫理、透明性、セキュリティっていうことを担保しながら、実装力ということで、ほかに先んじるような自治体になっていければなと思いますので、とにかくは使ってみることはあるのみというふうに思います。

それから、移住者の受入れの話ですけども、既にリモートワークとかA Iが普及してますから、勤務地と居住地っていうのは分離されているんですね、既に。ただ、その移住の意思決定っていうのを見てみると、そうした就労のことだけではなくて、住まいとか子育てとか教育とか、医療、交通、コミュニティ、そうしたことの総合的な条件で皆さん判断されておりますので、従来の移住定住政策っていうのが極めて有効ではないかなと思っております。

ですので、引き続き空き家バンクによる空き家情報の発信とか、移住者と住まいのマッチングですとか、あるいは歓迎体制づくりと、そういったことを着実に進めていきたいと考えておるところでございます。

〔市長 都竹淳也 着席〕

○2番（中田利昭）

答弁ありがとうございます。移住計画についてちょっと再質問させていただきますけども、確かに前回の私、質問で森田部長からも移住政策についていろいろ説明をしていただき、飛騨市の政策はかなり優れておるなと思った次第なんですけども、やはりまだ到来しているかしていないか分かんないところがございますけれども、やはり劇的な変化で都会では嫌だよっていうニーズ、飛騨市がいいよっていう方がいるかいないかは別として、やっぱりこのチャンスをどうしても逃さず受け入れたいなと私は考えるんでございますけども、何とかそのような今までにプラスアルファの移住政策は考えていらっしゃるのか、お聞かせください。

◎議長（澤史朗）

答弁を求めます。

△市長（都竹淳也）

そうですね、ちょっとまたいろいろ考えてみたいと思いますけれども、一つの切り口はですね、最近A I婚活っていうのがあります。いろんな自治体が実は非常に成果を上げていて、うちも広い意味では使えるようになってはいるんですが、非常に成功率が高いっていうんですね。合う人を見つけていくのが非常に得意なので、というのを応用しますとね、移住者がどういうタイプの人かを与えられた条件と結びつけるということが出来る可能性があるなということも思っておりますので、多分今あるものの中でできると思うんです。なので、そういったことを試しにやってみるといっても一つじゃないかなというふうに思いますので、いろいろ試してみたいというふうに思います。

○2番（中田利昭）

先日、江崎知事の話聞いた中でも、やっぱり東京ではなかなか子育てしづらいと。知事の

経験談でも、やはり作れるものなら4人でも5人でもっていう意気込みだったらいいんですけど、やっぱり1人育てるのがやっとなで、東京では無理ということが分かったということで移住政策を知事独自でも進めたいと言っておりましたので、飛騨市もですね例えば私、単身者でもいいですけど、やはり子育て世代の方をどうしても来ていただければいいのじゃないかと。こういう方たちは高収入でもありますし、大変地元にもなれ親しんでいただけるんじゃないかなと思っておりますので、ぜひともその辺はまた考えていただきたいと思えます。

それでは、4点目に移りたいと思えます。これも先ほどの答弁にもう既に答えが出ていると思われるんですけども、改めて聞かせていただきます。これはAGIに限らずですね、今からAI時代を見据えてのことです。飛騨市AI活用基本条例の制定についてです。

行政、教育、医療、介護、民間企業全てがAIを扱う時代には、ルールや倫理、透明性が必要となってきます。新しい技術は私たちへの恩恵も大変大きいのですが、それを悪用するものが出てくるのも世の常です。人間と同等かそれ以上の知的作業が可能となるAGIは、そのリテラシーも問われることとなります。飛騨市が全国初のAGI活用基本条例を制定すれば地方自治体のトップランナーとなれます。そこでお伺いいたします。

一つ目です。飛騨市AI基本条例について。AIの適正利用と市民保護、リテラシー向上に向けて飛騨市AI基本条例を制定する考えがあるか伺います。

二つ目です。市民向けAI勉強会について、これ先ほどのとちよつかぶると思うんですけども、これは特にそのルールだとかいうことに重点を置いてという意味でお聞き願います。

既にAIを活用する方が多く見える一方、年配の方には進化のスピードについていけない方も多く見えます。1人も取り残さないことを政策指針の一つに挙げていますが、市民向けAI勉強会を行う考えがあるか伺います。

◎議長（澤史朗）

答弁を求めます。

〔市長 都竹淳也 登壇〕

△市長（都竹淳也）

AI基本条例という御提案です。先ほど来のお話みたいになってしまいうんですけども、ただ条例ということになりますと、これはまた少し切り口が変わってくるんですね。条例でもって何を決めるのかということをお考えなきやいけない。一つに考えられるのは宣言条例的なものということがあります。AIの推進を図りましょうねということをお宣言するという、こういうこともあるかとは思いますが、しかし、ただつくただけみたいになりますから、そうするとやっぱり実際に条例化するとすれば、議員がおっしゃったように適正利用とか市民保護とか透明性とか説明責任というか、こうしたことになんたろうなというふうに思えます。

ただ、これ先ほど来のお話で、技術がもう加速度的に進化しておりますし、国のルール形成自体もまだ変化の途上にあるということですから、この時点でそれこそ押し取り刃で条例をつくってしまえば、かえって市民の皆さんの民間の利活用を妨げたり制約になったりする可能性もございまして、何と言っても瞬く間に陳腐化してしまうのではないかと懸念されるわけがあります。

したがって、やっぱり繰り返しになりますけども、AIの実証・活用ということで使ってみな

がらですね、あとその実績と国の動向、こうしたことを見極めながら、条例化の必要性があるものかないかということ冷静に考えた上で、取り組むべきテーマかなというふうに思っております。

〔市長 都竹淳也 着席〕

◎議長（澤史朗）

続いて答弁を求めます。

〔企画部長 森田雄一郎 登壇〕

□企画部長（森田雄一郎）

私からは、2点目の市民向けA I勉強会についてお答えいたします。デジタル活用の格差解消は、誰一人取り残さないという飛騨市のまちづくりの要ともいえます。このため、市ではこれまでも専門的知識を有する職員による生成A Iの基礎理解や安全な使い方を学ぶ場を設けてまいりました。具体的には、市民カレッジの場を活用した主に高齢者向けの生成A I基礎講座、小中学生を対象とした夏休み生成A Iセミナー、市役所の職場体験に参加した高校生対象の講座など、二月に一回程度のペースで開催してきており、12月中にも市民も参加可能なオンラインセミナーを開催する予定としております。

ただ、これまでの市民の参加実績としましては、全体で延べ60名から70名程度とまだまだ少ない状況にあります。こうしたことから、御高齢や初心者の方であっても気軽に受講できる環境を整えた上で、年代・関心別の分かりやすい講座を継続的に開催するなど、引き続きA Iの普及推進に向けた取組を強化してまいりたいと考えております。

〔企画部長 森田雄一郎 着席〕

○2番（中田利昭）

答弁ありがとうございます。私も民間で長く生きてきましたので、非常に悩ましいところなんですけど、その基本条例、一度決めるとなかなか変えられないのかなという私イメージ持ってます。

民間業者でしたら、もうすぐもう時代に合わないものがあればすぽんと変えちゃうっていう臨機応変にできるんですけども、やはりどうでしょう、こういう地方自治体においてこの基本条例っていうのは、例えば毎年見直すですとかそういうことっていうのはちょっと勉強不足で分からないんですけども、時代に合った条例に変えていくっていうのは難しいものなんでしょうか。お聞かせください。

◎議長（澤史朗）

答弁を求めます。

△市長（都竹淳也）

そうですね、条例っていうものがそういうことを規定するものに適した手法かっていうことだと思うんですよね。むしろそれだったら先ほどの計画のほうがいいと思います。

条例っていうのはやっぱり違うものだというふうに私は思っておりますので、宣言条例的なものも私はあんまりやらない主義なんですけど、やっぱりそれをつくったことによって市民生活がきちんと変わっていくっていうことが、政策も含めて担保されて初めて条例の意味っていうのはあるんだろうというふうに思いますから、やはりこの爆発的な進歩の中では、やってもやっぱり

計画とか、あるいは指針とかですね、そういった手法のほうが適しているのではないかなというふうに思いますので、また状況を見ながらいろんなことを考えていきたいなというふうに思います。

○2番（中田利昭）

よく分かりました。何らかの形でちょっとそういう問題意識を持っていただけると私もうれしいです。

それから市民向けのAI、今やっているよという話を聞きましたが、やっぱりなかなか参加者が少ない。私の年代ですらも分からないって方が多数でございますので、その辺ももう少し工夫して、例えば40代、50代を最初にちょっとターゲットにして勉強会を開くだとか、例えばフェイスブックが出た頃、2011年頃ですね、ちょっといろいろな関係で私と知り合いとでフェイスブックの講習会を年配者向けにやったんだけど、非常に好評でございまして、そのときに爆発的にフェイスブックの利用者が増えたことをよく覚えております。

ですので、例えば市の方が講師をするのかちょっと分かりませんが、やっぱり市民目線の我々みたいな、私、そのフェイスブック講習会したときは知り合いの年配の方とか私の知り合いの年配の方の友達とかを連れてきていただいて、アカウントを取得するところからどうやってやるかっていうことをしたんですけども、私で説明になるかどうか分かりませんが、私、幾らでも来ますので、ぜひ活用していただいて、まずやっぱり40代、50代、あと60代にちょっとつなげていけないか、ちょっとお伺いしたいと思います。

◎議長（澤史朗）

続いて答弁を求めます。

□企画部長（森田雄一郎）

ぜひ中田議員に市民カレッジ、来年のところで1枠持っていただければいいんじゃないかなというふうに思います。

先ほど答弁でもちょっと申しましたけど、年代別どういった関心事に御興味があるのかなっていったような切り口のところで、そこのどういうやり方がいいのかっていうのは今いろいろセミナーをやってくださってる方も職員もいろいろな切り口で考えておりますので、そういった中で検討を進めていきたいと思っております。

○2番（中田利昭）

ありがとうございます。私も微力ながら何でもいたしますので、ぜひやっていただきましてお願いをいたしまして、私の一般質問を終わらせていただきます。

〔2番 中田利昭 着席〕